

## 性格形成に及ぼす乳幼児期の母子関係に関する研究

伊 藤 信 子

## 目 的

母一子の初期的なつながりは、単なる feeding という生理的欲求にのみ依存するものではなく、母親の存在そのものが子どもに向けられることにより成立するものである。そして、子どもはこのような母親を通じ、世界を体験してゆけると考えるものである。では、この初期的なつながりさへ持ち得なかった子どもには、何が障害をもたらしたのであろうか。ここでは、子どもの側の要因以上に、特に、母親側の要因を重視し、考えていこうとするものである。

本来、母親は、相手の身になって感じる能力と、子どもの生命の保持とその成長のために絶対的に必要な配慮と責任を持ち、無条件の情愛の念を示めさずにはいられないものである。

乳児期より孤立していた子ども達の母親には、この点に欠けていたのではないかと、母親との面接時に考えられることがしばしばある。

そこで、このような子どもたちの母親を中心として、母親としての存在に重みをつける要因、すなわち、共感性、母親意識（母親としての役割意識、子どもに対する細心の配慮）および、これらの背景にあるであろうところの子どもに対する態度等を検討する。

## 方法、対象

1. 共感性——ロールシャッハテストを10名の自閉症児の母親に個別で施行。その他に、テスターの要因を考え、5名の、特に問題のない、年齢が自閉症児と類似の子どもを持つ母親に施行。集団では、物と人物および人物のみの表情写真18枚をプロジェクターにより、1秒間ずつ映写し、その写真に対する印象の記述の仕方について、共感性を得点化した。この対象は、自閉症児の母親7名、および、同じ問題を持つものであるが、その原因が明確である精薄児の母親13名。他に、上記2群の集団については、担当セラピスト2名によって共感性を含む他の要因についての評定を実施。
2. 母親意識——TAT類似テストを施行。図版は名大版より、特に親子関係をねらいとしたもの3枚(J7F, J18, J22)、および、本研究の目的にそって作製した(マレー版の8BMを改作したものを含めた)4枚の母子関係図版の計7枚である。個人テストでは、筆者がテスターで、自閉症児の母親9名、特に問題のない子どもの母親5名、子どものいない年齢20才から25才までの女

性(年齢その他の違いによる保護者としての立場の相違をみるため)8名に対し施行。集団テストでは、プロジェクターにより、3分間映写し、自閉症児の母親7名、精薄児の母親13名に記述してもらった。役割意識については、同一視された人間像により、その役割意識を段階づけした。また、配慮については、新たに作製した4枚については意図的に、明確にあらわれていない risk を設定し、それに対し、どのような配慮がなされるかという点から検討した。また、役割意識と他の要因との関連をみるため、上記の子どものいない女性のうち6名に対し、8名の大学院学生に評定を依頼した。

3. 養育態度、その他——質問紙により、乳児期周辺の子どもへのかかわり方(出産前後の子どもに対する気持などを含む)、接触量、および、現在の養育態度(接触量の多少、接触時の寛容さ、厳格さ、自己中心的養育の3カテゴリー)および、YGより選択された性格についての項目が含まれるものを、保育園児(工場地域にある保育園、住宅地域にある保育園より)85名の母親、および、自閉症児の母親7名に施行。また、乳児期周辺でのかかわり方については、前述の集団の自閉症児の母親7名、精薄児の母親13名にも施行。

## 結 果

1. ロールシャッハテストにおいては、自閉症児の母親は、共感性の乏しさを含む対人的な面での特徴が認められた。その他の側面においては、母親の間で種々の相違があり、自閉症児の母親のパターンは見出し得なかったが前述の共感性の乏しさに加え、客観的立場に立ち得ず、他人と同様の世界を見ることができないなど、対人面での困難さを示していた。

しかし、写真による共感性テストにおいては、自閉症児の母親と精薄児の母親では、ほとんど差がみられなかった。写真による共感性テストは一応、妥当なもの(評定による共感性と相関があったため)であろうと思われるので、共感性のなさを、自閉症児の母親特有なものであると考えことはできなかった。

その他の調査、例えば、セラピストの評定、TAT類似テストの反応内容から、自閉症児の母親は、精薄児の母親に比べ、共感性が乏しい傾向がみられた。

2. 母親意識については、役割意識と risk に対する配慮、および、関係の持ち方により、TAT類似テストで検討したわけであるが、まず、役割意識については、自

閉症児の母親は、問題のない子どもの母親に比べ、役割意識が乏しく、子どものいない女性に比べ、役割意識は強かった。このことは、役割意識が年齢あるいは、子どもを持つことを通し、保護されるものから、保護するものへと移行することにより変化していくものであり、自閉症児の母親が母親として未成熟な段階にいないかと予想された。しかし、精薄児との差がなく、やはり自閉症児の母親特有のものであるとはいえなかった。

また、子どものいない女性についての評定により、役割意識の強い母親は“子どもぼさ”の少い、母親のイメージを多少持っているものであることがわかった。

risk に対する配慮は、予想される危機に敏感に対処する能力という保護者にとっては無くてはならない要因と思われるが、自閉症児の母親は、子どものいない女性、問題のない子どもの母親、精薄児の母親よりも、

risk に対しての配慮に欠ける傾向があったが、特に有意な程ではなかった。

また、主題の内容においては、自閉症児の母親は、精薄児の母親、問題を持たない子どもの母親に比べ、関係が negative なもの（例えば、マレー版の 8BM の前面の男性を母親に描き変えたもので、問題を持たない母親など、ほとんどが、子どもの状態を心配している状態を述べているが、自閉症児の母親では、子どもを食いものにしている、置きざりにして行くなどのものが目立った。）

3. 乳児期周辺のかかわり方については、自閉症児の母親は、有意ではないが、必ずしも、子どもに対して positive な気持を持っていなかった母親が目立った。しかし、接触量については、どの母親とも、ほとんど差がなかった。（また保育園内での行動特性別にこれらの項目について検討すると、対人面で不安傾向のある、孤立しがちな子どもの場合、乳児期周辺のかかわり方が negative なものが多かった。）

現在の養育態度については、自閉症児の母親は、特に自己中心的な養育態度が特徴的であった。かかわることが困難な子どもを持ったことによる reaction とも受けとれるが、養育での他の側面の変動の乏しさに比べ、変動が大きすぎる感はある。（接触量と接触時の厳格さ、寛容さを組み合わせると従来の養育のパターンが出るが、自閉症児の母親は、保育園児の母親に比べ、差がない。従来の文献で、質問紙のみで、自閉症児の母親に問題がないとするものが多いが慎重でなければならぬと思われる。）

質問紙による性格については、自閉症児の母親は、精神的に安定さを欠き、活動性の乏しい傾向にあった。しかし、精薄児の母親との差はあまり認められなかった。

この他、評定等による共感性の豊かなもの、子どもの接し方が上手なものについて、これらの項目について検討すると、乳児期のかかわり方が positive で精神的に安定している傾向があることがわかった。

## 討 論

以上、自閉症児の母親を中心として、検討したが、自閉症児の母親には、母親としての存在に重みをつけるものに欠ける傾向があることが確かめられ、また、性格、養育等に問題があったが、精薄児の母親との差は乏しかった。このことは、問題がある子どもを持つ為に混乱しているという考え方に反論する材料にはなりえないことを示しており、自閉症発症の要因に結びつけることはできなかった。しかし、特に問題が表面化していない乳児期において、すでに子どもに対して positive な気持を持っていない母親が目立つことに問題は残るであろう。

今回は、症状の異なる自閉症児を一括して考えてきたが、多くの症例を集め、症状別に考えていく必要がある。例えば、言語の有無等の違いが、自閉症児の母親の違いにより、説明する面もあるからである。